DoubleArts『A little"勇気"』

マヨラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＤｏｕｂｌｅＡｒｔｓ『Ａ　ｌｉｔｔｌｅ”勇気”』

【Ｎコード】

Ｎ５０３２Ｈ

【作者名】

マヨラー

【あらすじ】

想いを伝えるのには、タイミングがある。いつかそのタイミングが来た時に、しっかり想いを伝えられるように、今はためておこう。君に”好きだ”と言えるだけの、ほんの少しの、小さな勇気を…。

「隠し事」

ねぇ…。

もし、私にもう少しだけ勇気があったら…。
この心のモヤモヤは、消えてくれるのかな？
もし、私にもう少しだけ勇気があったら…。
君に、この想いを…伝えられるの…かな…？

『Ａ　ｌｉｔｔｌｅ”勇気”』

…夕食時、部屋には君と私、二人きり。
ファランさんはと言うと、街に知り合いが居るからと言って、会いに行ってしまった。
夕食までには戻る、と言っていたが、未だに帰ってこない。
スイはと言うと、ファランを探しに街へ行ってしまった。
何でも、今日昼間に喧嘩売った相手から”酒”を貰ったらしく、それをファランに無理矢理飲ませる為に、ファランを探しに行った。

テーブルの上では、スイがコップに注いだ酒と水が、合わせて四つ。
どれも透明で、色に違いはない。
匂いでも嗅がない限り、見分けは付きそうにない。

「はぁッ……。」

二人きりの部屋で、溜め息をつく。
想いは、募るばかりだ。
溜まるばかりだ。
いつまで経っても、吐き出せそうにない。
もう少しだけ…私に勇気があれば…。

「…どうしたんだ？最近妙に深刻な顔してるけど。」

キリが、俯いたエルレインに言った。

「…えっ？あっ、大丈夫です。何でも…ありません。」

…この人は、私が強がってたり無理してたりすると、すぐに見抜いてしまう。
にも関わらず、この想いだけは、一向に分かってもらえそうに無い。
キリさんは、肝心な所が鈍い。

「いや、絶対何かおかしい。エルー、何か俺に隠してるだろ？」

今日もそうだ。
キリさんは、私が隠し事をしてる事ぐらいお見通し。
でも、その隠し事が何なのかは分かってくれない。
そして、執拗に問いただす。

「エルー？」

「……。」

キリが、エルレインの眼を覗き込む。
目を合わせると、全てが見透かされそうで、エルレインは、目をギ

ュッと閉じた。

「エ・ル・う？」

キリの顔がエルレインの顔に近づく。
近づいたエルレインの顔からは、ほのかに熱が感じられた。
ここでキリは、エルレインの手が自分の手を強く握っている事に気が付いた。

「……エルー？」

エルレインが、ガタッと立ち上がった。

「やめてくださいよ！私にだって、隠したいことの一つや二つぐらいありますよ！それに…物事には、タイミングがあるんです！もうちょっと私の気持ちも考えてくれたって……」

そこまで言って、エルレインは言葉を切った。

思い返してみれば、キリさんはいつでも、私の事を一番に考えてくれていた。
…キリさんは、何も悪くない。

エルレインは再び椅子に座ると、テーブルに顔を伏せた。

「…ごめんなさい。私、間違えてた。キリさんは、いつも私の事、考えてくれてますよね。それなのに…私は…。」

エルレインは黙り込んでしまった。
キリは、何も言えずにいた。

自分は悪くない、とは言われたものの、何か、悪い事をしてしまった気がした。

「なぁ、エルー。」

「…何ですか？」

「…何か、悪かった。」

「謝らないで下さいよ。キリさんは悪くないんですから。」

「……。」

気まずい雰囲気が、二人の間に流れた。

エルレインは、溜め息をつくと、テーブルの上に置いてあるコップに手を伸ばした。
喉が渇いていたので、中身を一気に飲み干した。
すると、エルレインがいきなり咳き込んだ。

「ゴホッ…ゴホッ！！！」
「どうした！？エルー？」
「苦い…です。これ、水じゃない…！」

二人が顔を見合わせた。
…
……
……
『酒？』

「隠し事」（後書き）

一話完結の短編にしようと思ったら、案外長引いちゃいました。多分、三話完結ぐらいになると思います。最後まで読んで貰えたら幸いです。

「君のキモチ、俺のキモチ」（前書き）

エルーが相当に乱れております。御注意下さい。

「君のキモチ、俺のキモチ」

「どうしましょー、キリさぁん？未成年なのにお酒飲んじゃいましたょぉ。酔っ払っちゃったらどぉしましょー？」

「エルー…。」

頬が仄かに赤く染まり、いつもと違う口調で話すエルレインを見て、キリが言った。

「…もう酔ってるんじゃ？」

『Ａ　ｌｉｔｔｌｅ”勇気”』中編

「なぁに言ってるんですかあ？私はそんな簡単に自分を失ったりしませんって！」

エルレインがキリに思いっきり顔を近付けて言う。

「ちょっ…エルー！顔近い近い！！」

キリはエルレインから離れようと体を後ろに傾けたが、エルレインは更に詰め寄った。

エルレインの少し乱れた息がキリの頬に当たる。

汗でほんのり濡れた髪が、キリの額に触れる。

いつもと違う彼女の眼差しが、キリを絡めとるように捉えた。

「あれぇ、キリさん顔赤いですよ？どしたんですか？」

エルレインがキリの頬に手を置いた。

「ちょっ…やめてくれ！エルー！！」

…壊れそうだった。何もかも。

愛しい君が今。

俺の目の前で…

興奮してる。

誘ってる。

少しだけ、壊れてる。

…俺まで、壊されそうだ。

「あっ…もしかして…。」

エルレインがキリを押し倒し、グイと顔を近付ける。

キリの胸に指を立て、甘い声で言った。

「…ドキドキ…しちゃってます？」

「……！！」

……俺は、このまま壊されて行くのか…？

「…ねぇ、キリさん？」

「フぁッ！ハイッ！？」

エルレインが少しだけ落ち着いて言った。

「私ね…さっきは隠してたんですけどぉ、今ならキリさんに言えそうな気がするんですよ。」

キリはゴクリと唾を飲み込んだ。

「この…キモチを。」

エルーの顔が、酔いとは違う赤みを帯びた。
酔ってても恥ずかしがってるエルー可愛いなぁ、なんて思ってる場合ではない。

このままいけばエルレインは確実に、”キモチ”を伝えるのだろう。
だがしかし、それは本当にエルレインが望む事なのか？
実際、先程は隠していたキモチだ。
恐らく、酔いの勢いだけて伝えようとしているのだろう。
だとすれば、それはきっと間違えてる。
今、この状態で伝えれば、エルレインは酔いが覚めてからきっと後悔するだろう。
それだけは、いけない気がした。

だが、同時にエルレインのキモチを知りたい自分もいて…。

キリは葛藤していた。

「あのね、キリさん…？」

そんなキリに決断の時間を与えずに、エルレインの体が近付いてきた。

キリとエルレインの繋がれた手が、キリの胸とエルレインの胸に挟まれた。

二人の心臓が、激しく鼓動しているのが感じられた。

「私…ねぇ、キリさんが…」

「……ッ！！」

キリが歯を食い縛った。

自分が望むのは何だ？

エルーのキモチを知ることか？

…違う。

エルーの幸せなはずだ。

では、今自分がしなければならないのは何だ？

少しネジが外れてしまった、この愛する人の笑顔を護ることではないか？

「キリさんの事が……ス…」

「……ッやめろ！エルー！！」

「君のキモチ、俺のキモチ」（後書き）

とりあえず一言。すいませんすいませんすいませんすいません！！！！エルーを壊してしまってすいません！駄文を書いてしまってすいません！何か、変な作品になっちゃったな…（泣）すいません。

「A　ｌｉｔｔｌｅ&ｑｕｏｔ；勇気&ｑｕｏｔ；」

「……ッやめろ！エルー！！」

気づけば、声が出ていた。

突然の大声に、エルレインがビクッ、とする。

「大切な…想いだろーが。」

『Ａ　ｌｉｔｔｌｅ”勇気”』後編

依然、キリの上に馬乗り状態のエルレインが、キリから顔を離した。

「エルーの想いがどんなのかは知らないけど、そういう想いはさ、どんなに辛い想いでも、どんなに悲しい想いでも、どんなに恥ずかしい想いでも、自分の意思で、勇気を出して伝えるのが正しいと思うんだ。……だから…。」

キリは言葉を切った。

ここまで言えば、十分だと思ったからだ。

「…そう…ですよね。」

エルレインが呟いた。

「何やってるんだろ…私。」

溜め息をつきながら、キリの横にバタンと倒れ込んだ。

「さっき自分で”タイミングがある”とか言ったばかりなのに…ホント、弱いですよね、私。」

「エルー……。」

繋がった手が、熱かった。

まだ鳴り止まない胸の鼓動、止まらない汗。

…鮮明に記憶に残る、少し前のエルレインの顔。

…勿体無い事、しちゃったかな。

こんなんだからスイに

「ヘタレ」って言われるんだよな。

「キリさん…。」

ふと、エルレインが呟いた。

「ありがとう。」

小さな声で、エルレインが言った。

エルレインの方を見ると、既に寝息をたてて寝てしまっていた。

「ありがとう…か。」

間違いない。
自分のしたことは、正しかった。
エルレインのその一言で、キリは実感した。
「なぁ、エルー。」
眠っているエルレインの耳元で、キリが囁いた。
「弱くなんか、無いから。あんたは強いから。大丈夫。」
愛しい人の頬に、そっと手を置く。
あんたの気持ちは…
大切な気持ちは…
いつか、俺が自分で貰うから。
その時は、俺の気持ちも全部捧げるから。

恥ずかしいかも知れないけどさ…

ちょっとずつ溜めるから。

「少しの”勇気”」を。

「A　ｌｉｔｔｌｅ&ｑｕｏｔ；勇気&ｑｕｏｔ；」（後書き）

私の変な妄想から始まってしまったこの小説。最後まで読んで下さり、有り難う御座いました！この作品は私にとって、初めて最後まで書き上げる事が出来た連載小説です（三話だけですが）達成感ですね。最後に、これからも他作品の製作に尽くしていきたいと思うので、応援よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5032h/

DoubleArts『A little"勇気"』

2010年10月10日20時20分発行